

論文

## 「錆びた炎」問題の論点とその今日的意義

北村 健太郎\*

### 1. 本稿の目的

文学作品に障害者/病者が描かれることは多い。そして、作品に描写される障害者/病者の姿は、「個々の作家の障害者観を示すとともに、その時代の社会一般の対障害者観をも如実にうかがわせるもの」(花田 [2002: 3])である。その一方、文学作品は「障害とその人をあらわすことばが、ときに『差別語』、あるいは『差別を助長する』などという言い方で、抗議の対象とされる」(生瀬 [1994: 93])こともある。

血友病<sup>1</sup>を扱った戦後日本の代表的な作品として、有馬頼義『失脚』[1958]と、小林久三『錆びた炎』[1977]が挙げられる。それぞれの血友病の描写は、その当時の血友病/血友病者<sup>2</sup>への典型的な眼差しを示している。どちらの作品にも共通するのは、血友病者が怪我による出血を恐れる親に隔離保護されて育てられる様子が描かれている点である。二日市安は『失脚』の「血友病だったために、外傷による出血を恐れる両親に外出を禁じられ、隔離同然の少年期を過ごした」(二日市 [2002: 202])という設定は、自身の経験と重なって強烈な印象を受けたと述べている。

江戸川乱歩賞を受賞したこともある小林久三の推理小説『錆びた炎』は、血友病者本人から強い抗議運動が行われた作品である。それは、朝日新聞の推理小説評論で『錆びた炎』における血友病の誤った医学的記述が指摘されたことに始まり、血友病者本人たちによる抗議運動、小林や他の作家/評論家の反論へと展開していく。以下では、『錆びた炎』の血友病の誤った医学的記述の問題点と、それをめぐる抗議と反論の全体を総称して、「錆びた炎」問題と呼ぶことにする。

「錆びた炎」問題と構造的類似性を持つ問題としては、1993年の日本てんかん協会による、筒井康隆『無人警察』への抗議<sup>3</sup>が挙げられる(生瀬 [1994: 91 - 172])。もちろん、文学作品をめぐる異議申し立ては、障害/病気に限ったことではない。特に近年、人種差別、性差別など様々な場面で行われてきた。こうした軋轢は丁寧に分析される必要があるが、本稿ではそれらに深く立ち入ることはしない。本稿は、「錆びた炎」問題に対する抗議運動が、抗議運動を行った血友病者本人たちの歴史にとってどのような位置付けや意義を持つのかを考察することに主眼を置くからである。広くは「言葉狩り」と称されるこの種の議論に「血友病の歴史」という時間軸から考察を試みたい。

本稿では、第一に、『錆びた炎』への抗議と反論の詳細を追いながら、「錆びた炎」問題の論点を検討する。第二に、「錆びた炎」問題を通じて、1970年代の血友病者が置かれていた社会的状況を描き出すことを試みる。最後に、戦後日本の血友病者の歴史にとって、「錆びた炎」問題での抗議運動にはどのような歴史的意義があるのかを考察する。

### 2. 「錆びた炎」問題

まず、1977年に血友病者の間で問題とされた「錆びた炎」問題の経過を確認する。『錆びた炎』は、小林が書いた長編推理小説で、1976年に角川書店の月刊誌『野性時代』11月号に掲載された。翌1977年1月10日、同じく角川書店から単行本として出版されている。さらに『錆びた炎』は松竹株式会社で映画化され、同年2月26日に封切られた。

この『錆びた炎』の中に、医学的に誤った血友病に関する記述が多数あったこと、読者に血友病者に対する誤っ

---

キーワード：血友病、抗議運動、1970年代、マスメディア

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2003年度入学 公共領域

たイメージを植え付ける可能性が大きい、と多くの血友病者に認識された。『錆びた炎』中の血友病の記述を問題視した血友病者は、強い抗議運動を展開した。映画化も、血友病者の抗議運動を強める一因となった。

多くの血友病者が、小説『錆びた炎』に問題があると気付いたのは、朝日新聞で芸文欄を担当していた記者の安間隆次が書いた推理小説評論からであった。1977年2月7日付朝日新聞に掲載された評論の『錆びた炎』に言及している部分を以下に引用する。

子どもの誘いを扱ったこの小説は、雑誌発表直後にこれをまねたとも思えるような事件が実際におきて話題を呼び、映画化も進んでいる。だが、作中に織りこまれた血友病の描写は、現代医学では考えられない内容で、作者の意図するしないは別にして、結果的にはこの病気に対する偏見を助長しかねない恐れさえあるものだ。

<入院中の血友病の子どもが誘いされ犯人は病院長に身代金を要求する。子どもは七十二時間以内に救出して輸血しないと危険>という設定が作品の冒頭にはめ込まれているが、すでに血友病が命にかかわる病気ではなくなっていることは、たとえば東京医科大で扱った三百例のうち死亡者は皆無に近い事実などでも証明されており、「七十二時間」といった設定など医学的には考えられない、と同医大の専門医も指摘しているほどだ。進んだ治療法や新薬の開発など無視して<八歳までにその六〇%が出血死>などと無神経な表現を使ったり、「注射禁止の薬の注射」を有効な治療法のように書いたり　それもこれも、たとえフィクションの世界であろうと、人間を道具として扱ってもいっこうに恥じない、最近の一部の風潮から生まれた一例にすぎないのかも知れないのだが……（安間 [1977]）

ここで、当時の血友病の医学的認識を確認する。血友病の一般的な説明は煩雑になるので略し、東京医科大学臨床病理学教室の藤巻道男助教授の「錆びた炎」問題に即した談話を挙げる。

藤巻道男助教授（厚生省研究班メンバー）は「血友病の医学水準の現状から見るとほとんど誤り」と指摘する。（略）同助教授は「厚生省研究班のデータでも8歳以下の死亡率は2%ぐらい。私は300人ほどの患者をみているが、8歳以前にはほとんど死なないし、長生きする人も多い。またトロンピンは傷口に塗って止血するための薬で、注射すると患者は死んでしまう。交通事故のような大量の出血の場合以外は輸血は必要ないし、作品中の子供のように関節出血のケースでは72時間以内に輸血しなければ死ぬなんてことはありえない」といっている（毎日新聞 [1977 - 03 - 10]）。

以上の簡単な説明からでも、『錆びた炎』の血友病の描写と当時の血友病者の現実には、大きな乖離があることが分かる。

さて、安間の記事を知った木野内荘三は、自らの所属する患者会「東京ヘモフィリア友の会」（以下、東友会）<sup>4</sup>に、この「錆びた炎」問題を提起した。2月14日に理事会が開かれ、翌2月15日に著者小林久三および出版元角川書店宛に抗議文が発送された。以下、抗議文の要点を引用する。

すでに朝日新聞紙上（昭和五二年二月七日朝刊）等で明らかなように貴殿の著作である『錆びた炎』（角川書店版）の血友病に関する記述の中で、現在ではすでに医学的知識とは異なるものが、あたかも現在の常識のように平然と書かれており、また血友病患者の病状認識にもはなだしい誤解があります（木野内 [1978 : 104]）。

小説というある社会的影響力をもつものに、このように血友病についての、正しい理解を誤らせはなだしい誤解を生ずるような記述がなされたことは、あらゆる障害の中で強く生きていこうとする血友病患者にとっても与える影響は計りしれないものがあります。この小説は、血友病にたいする偏見を温存するのみならず、助長させるものです。それは、具体的に示せば、幼稚園の入園、小・中学校への入学、高校進学、就学・就職等において、血友病患者にたいし、不利益を与える素材となる恐れがあります。その意味でも貴殿の責任は非常に大きなものであり、たとえこの本がフィクションであったとしても、私たちとしては、これを看過するこ

とはできません。

私たち「東京ヘモフィリア友の会」は、このような現在の血友病に関する誤った認識のもとに小説を書かれた言語表現者としての貴殿にたいして強く抗議いたします。

なお、私たちは、以上を貴殿がすみやかに認め著書である『錆びた炎』に関して、何らかの具体的な方法で、社会的責任を明らかにされることを要求いたします。

この抗議文にたいして、昭和五二年二月二五日までに、文書で、下記宛に、回答されるよう要求いたします（木野内 [ 1978 : 104 - 105 ]）。

それに対し、小林は2月25日付で東友会に回答文を送っている（傍点は木野内）。

まず拙著『錆びた炎』の一部に、血友病の問題が扱われ、その記述が現在の血友病医学の水準からみて、やや適合しない箇所があり、そのことが血友病患者の皆様、ならびに御家族の方々に、御迷惑をお掛けしたことを、心からお詫びいたします。

「錆びた炎」の血友病に関する記述は、南山堂『医学大辞典』（七六年四月二〇日発行第七版）にもとづいたもので、同年七月に同小説を執筆した私は、『医学大辞典』の血友病欄の記述が、最新かつ正確なものと信じていたことを併せて付記しておきます（木野内 [ 1978 : 105 ]）。

このような形で責任をとらせて戴きますが、これはあくまで、作家としての良心と、社会的責任を痛感する自発的行為によるものであり、それ以外のなにものでもないことを付記させて戴きます（木野内 [ 1978 : 105 ]）。

このように、小林は自らの誤りを認め、東友会に対して謝罪した。ここに東友会と小林は一応の決着をみる。しかし、問題はここで終わらなかった。

ところが、奇妙なことに小林久三は、患者団体への低姿勢とは裏腹に、対社会的には反朝日新聞キャンペーンを展開してきたのです。「東友会」にたいして謝罪した二日後の『東京スポーツ』紙において小林氏は、自分の小説に「デタラメを書くわけがない」などと明らかに、東友会への謝罪と矛盾した発言をしているのです。患者団体には事実認識が誤っていたとして謝罪し、対社会的には事実認識が誤っていないと居直るという二つの対応を、同時に小林久三は示すことになったのです（木野内 [ 1978 : 102 ]）。

2月27日付『東京スポーツ』における、小林の発言は以下のとおりである。

僕は血友病専門家じゃないんです。だからデタラメを書くわけがない。『医学大辞典』という、当時最高の権威書を読んで書いています。それにあの小説は原稿用紙五一八枚、そのうち血友病の箇所は一枚半しかありません。その全く点景描写でしかないところをとり上げて、小説全体をデタラメだとやっつける。あまりにもムチャクチャな話でしょう（浅野 [ 1977 ]）。

これを機に、血友病患者の間で抗議運動の機運が盛り上がっていった。

### 3 . 抗議と反論の位置

小林の「居直り」とも取れる前述の発言を受けて、一部若手の血友病患者から、もっと強く抗議すべきだ、という主張が前面に出てくる。木野内も抗議続行を主張したひとりである。この記事の前日、2月26日に映画『錆びた炎』が封切られる。関西の血友病患者らは、さっそく松竹関西支社に申し入れを行った。2月28日の『神戸新聞』から引

用する。

映画の中で扱われている“血友病”の描写が現代の医学常識を正しく伝えておらず、誤解や偏見を生む恐れがある - として、関西に住む血友病患者が、映画会社に観客に正しい医学知識や患者の姿が伝わるようなチラシの配布などを申し入れることになった。(略)

このままでは誤った形で血友病が受けとめられる恐れがある - と、西田さんら関西に住む青年患者が集まって相談。「これを機会に正しい姿を知ってもらおう」と立ち上がったもので二十八日も大阪の松竹関西支社を訪れ要望したいとしている。

伊地知さんらは「患者側からの抗議に対して、著者と出版社は、誤解を生む恐れのある点を認め、三版までの在庫本は回収、四版から専門家の話をもとに血友病の部分を書き改め、おわびを入れたいと約束しているが、映画という強力なメディアを通して、何も知らない人に血友病は恐ろしい病気だという間違った知識がばらまかれ、入学や入社、結婚などの患者の周辺に影響を与える心配も強い」と訴えている(神戸新聞[1977])。

3月2日付の『毎日新聞』には、「偏見を助長する記述やめて」と題された岩下治による投書が載る。

小林久三著の『錆びた炎』という本には、血友病患者の記述で、誤りや現在の状態とは明らかに異なるものが、平然と書かれています。このような血友病に関するいい加減な記述をされることは、社会に血友病に対する誤った知識を与え、偏見を助長することにもなりかねません。それにより、具体的には就学、就労問題等で血友病患者の権利が不当に奪われることになりかねません(岩下[1977])。

その後、3月5日に木野内を代表とする「血友病にたいする偏見をなくす会」(以下、偏見をなくす会)が結成される。『錆びた炎』への抗議運動を通して、現在の血友病患者の実態を社会に知らせていくことを目的とした。偏見をなくす会関西地区代表であった西田恭治は、1977年4月3日付の「血友病への偏見を促す小林久三(『錆びた炎』著者)に抗議する!」というピラを作成した(下線は原文による)。

(冒頭略)私たちは、ただでさえ現存する偏見のために進学・就職・結婚等、多くの問題をかかえているのに、さらにその偏見を温存助長するような『錆びた炎』は、血友病患者の生存権をもおびやかそうとしています。

『錆びた炎』第4版からは医学的記述の一部だけを手直しし、続けて発行されていますが隔離保護的な記述はそのままですし、その上第4版の<あとがき>では、小林久三は「この修正は私の個人的良心によるものであってそれ以外のなにものでもない。」と書いています。

私たちは、これらの誤った血友病のイメージを流した小林久三の社会的責任は非常に大きいと判断し、小林久三に強く抗議します。

どうか皆さん。私たち患者の意を汲みとり、かつ、血友病とはあの小説や映画に描かれているようなケケンな病気ではないという事を充分理解して下さいようお願い致します(西田[1977])。

血友病患者本人たちの抗議が盛り上がっていく中、小林を弁護する推理作家や評論家も現れた。森村誠一、権田萬治である。両者は、血友病患者に対して、というよりは、記事を書いた安間に対して反論している。森村は『女性セブン』3月17日号での小林との対談の「推理小説の中の事件と現実の犯罪の差」の部分で、以下のように発言している。

推理小説と現実の犯罪のいちばん大きな違いは、推理小説では作者が都合のいいように状況を設定するということですよ。

それが、小林さんの『錆びた炎』の場合、血友病という病気なんです。その病気によって、72時間というタイム・リミットをかける。それによってサスペンスを盛りあげるわけですよ。

それを、朝日新聞が医学的なミスがあると叩きましたが、これは、推理小説が知的ゲームだということを、まったく度外視しちゃってる。血友病はたんなる道具だてのひとつであり、その医学的な記述だけをとりあげて、作品全体を否定するのはおかしいですね（女性セブン [1977 : 182 ]）。

一方、権田は、『幻影城』5月号に発表した「現代推理小説と医学 小林久三『錆びた炎』をめぐる」という評論の中で、安間に反論している。

小林久三の「錆びた炎」にしても七十二時間タイム・リミットというサスペンスの盛り上げに、被害者として血友病患者を設定したということは否定しえない。しかし、これを「人間を道具にする」というのであれば、推理小説は登場人物をナゾと恐怖や意外性を高めるため効果的に配置するのであるからほとんどそういう批判を受けざるを得なくなるだろう（権田 [1977 : 139 ]）。

もちろん、そういうナゾやサスペンスを強めるための道具立てとして、病人をふくめさまざまな人間を活躍させるといふことと、特定の人間や特異な病気の患者を不当に蔑視したり、差別したりすることは根本的に違うことはいふまでもない。安間氏のいう「人間を道具とする風潮」なるものが私にはよく理解できないが、一体どういう意味なのであろうか（権田 [1977 : 140 ]）。

これまでの流れを簡単にまとめると、血友病者が『錆びた炎』の血友病に関する記述の誤りが偏見や差別を招くと抗議しているのに対し、森村や権田はそれには直接答えず、安間の評論に対して反論するという、ずれた位置関係になっている。つまり、抗議と反論の位置は、血友病者 - 安間 - 森村 / 権田という三角関係である。

#### 4 . かみ合わない議論

しかし、主張の中身から考えれば、血友病者 / 安間側と森村 / 権田側が対立する形になる。結論から言えば、両者の主張はかみ合わないまま終わるのだが、どのように主張がずれていたのかを検討する。主張がずれていた論点は、大きく言って二点ある。ひとつは、作品の主題とパーツの問題であり、もうひとつは、推理小説の特異性の問題である。

まず、作品の主題とパーツの問題だが、ある作品の問題点を指摘して告発するとき、必ずと言っていいほど出てくる論点である。この論点について、生瀬克己は「この『作品の主題はなにか』ということこそが重要なのであって、それに沿わないことは、いわば些末なことであり、言ってみれば『揚げ足取り』にもあたるという批判は、いわゆる差別語云々、あるいは『差別を助長する表現である』という主張に対するなかなか有力で、強力な批判として成立しているのである」（生瀬 [1994 : 115 ]）と述べる。

森村 / 権田による安間への批判は、おおむねこのような主旨を踏襲している。「他人の不幸を玩ぼうとする意識など毛頭ない」（森村 [1977 : 5 ]）とし、安間が血友病に関する医学的記述の誤りに特化して『錆びた炎』を評したことに反論する。

いわく、「新聞紙上で指摘した箇所は、血友病に関する部分だけであり、推理小説の骨格とも言うべき構成についてはなんら触れていない。タイムリミットをかけるために作者が使用した血友病が誤っているということで、その作品が根本から否定されてしまったわけである」（森村 [1977 : 4 - 5 ]）、『錆びた炎』には誘拐犯罪小説のワク内ではいくつかの新しい実験的な試みが見られる」（権田 [1977 : 140 ]）「今回の安間氏の所論は余りにもバランスを欠いているといわざるを得ない」（権田 [1977 : 141 ]）として、安間の評論が血友病の記述以外に触れていないと指摘している。

では、安間の指摘は、森村や権田が言うようにまったくの見間違いなのであろうか。生瀬は作品の主題とパーツの関係について、作品の主題が重要であることは言うまでもないが、だからといって作品を構成するパーツ（『錆びた炎』では血友病者の「現実」の変化）を軽視することもできない、と指摘する（生瀬 [1994 : 115 - 116 ]）。作品

のパーツであっても軽視はできないとする血友病者の抗議や安間の評論と、作品全体（主題）から評すべきという森村や権田は、お互いの立脚点が根本的に違うのである。

次に、推理小説の特異性の問題についての論点がある。先の主題とパーツの論点をベースとしながら、さらに踏み込むかたちで、森村や権田は推理小説の特異性を主張する。森村は「紙上犯罪遊戯のルール 著者から読者へのメッセージ」という文章のなかでこう述べている。

推理小説は技術的な性格が強い小説ジャンルである。そのためにさまざまな道具立てが必要となる。推理小説から道具立てを取り除いたら、推理小説は成立しないと言ってもよい。

したがって、病気や身体障害などの人間の不幸も、道具として使われることがある。その疾患やトラブルによって現に苦しんでいる人達は、自分の不幸を道具にした推理小説は決して好感を寄せないだろう。

しかし、推理小説はエンターテインメントとしての紙上犯罪である。推理作家は、あくまでも読者に純度の高いエンターテインメントを提供したいだけであって、他人の不幸を玩ぼうとする意識など毛頭ない。紙上犯罪遊戯という推理小説の“宿命”をよく理解してもらいたい。それを遊戯として認めないのであれば、推理小説は存在し得ない（森村 [1977: 5]）。

権田も、「一つの主題を扱うとしても推理小説と純文学とではまったく違うのである」（権田 [1977: 139 - 140]）として、推理小説の特異性を強調する。

このような推理小説はナゾや恐怖を作り出すためにどうしても人間や背景を一つの人工的な状況設定の中に置かなければならない宿命がある。とくにトリックを中心とする古典的な本格ものにはそういう傾向が強い。（略）大真面目に考えれば、人間を全くの道具的存在として扱っているのだから、人間性の冒涇と受け取れないこともない。しかし、こういう読者は推理小説を読む資格はもともとないのである（権田 [1977: 139]）。

森村や権田は、推理小説を構成するトリックの部分に触れ、人間をある種「道具」的に扱うことは致し方ない側面があるとしている。

しかし、血友病者側はそれらを問題にしているのではない。映画化までされた『錆びた炎』の誤った血友病の記述によってもたらされるかもしれない偏見や差別を恐れ、それを問題視しているのである。木野内は、「実際に存在する病気、つまり事実について、これを作者が都合のよいようにまげてよいものでしょうか」（木野内 [1978: 111]）と反駁する。

この『錆びた炎』で使っている血友病とは、作者が創作した病気ではありません。もちろん、登場人物の丸山和也は実在しません。これは作家の想像です。だから小説はフィクション（虚構）と呼ばれます。しかし、その問題となっている血友病そのものは、まさに実在する血友病でなければならないのです。その点は作者も充分認識していたはずですが、だから冒頭で引用したように、小林氏は「デタラメを書くわけがない」と無理な開き直りもしなければならなかったのでしょうか（木野内 [1978: 112]）。

さらに木野内は、権田が評論の中で、『錆びた炎』中の血友病の描写はあながち間違いとも言えないのではないかと主張した点についても反論している。例えば、権田が以下のように述べる箇所がある。

さて、安間氏は、血友病が生命に危険なものでなくなったという断定から、さらに「『七十二時間』といった設定など医学的には考えられない、と同医大の専門医も指摘している」ときめつけているが、血友病に関するわが国の最高権威の一人である専門医（医学論争に巻き込まれるのがいやだということで特に名前を秘す）によれば、完全に成立するばかりでなく、七十二時間ではむしろ長すぎて危険ともいえるくらいだということである（権田 [1977: 137]）。

ここで争われているのは「七十二時間以内に少年を救い出さないと生命に危険が及ぶ」(木野内 [1978 : 115]) という小説の時間設定が血友病ゆえに成立するのか、ということである。木野内は「一般的にいて血友病は、特定の限られた時間に生命に危険が及ぶ病気ではありません」(木野内 [1978 : 116]) と述べ、権田の論拠の脆弱さを指摘した。

そこで、ここからは私の推測なのですが、その匿名の医師は、人が出血死する場合があるといった意味で「成立する」と述べたのではないのでしょうか。(略)私の推測以外の権田氏の推論のように、その匿名の医師が述べたとすれば、それは誤りであると思います。権田氏の論述は正確さに欠けていると思います。なんとならば、正反対にも読み込み方によって読めるような文章から推論を下しているからです(木野内 [1978 : 116 - 117])。

3月10日に偏見をなくす会は声明文を発表する。それを受けて、3月13日付『毎日新聞』に以下の記事が載る(木野内 [1977])。

江戸川乱歩賞の小林久三氏が書いた推理小説「錆びた炎」(角川書店)のなかで「血友患者の六〇%は八歳以前に出血死する」などとある記述が「誤りである」と患者団体の問題になっている。この小説は原作者がプロデューサーとなって映画化、現在松竹系で封切中。著者は本の記述を一部手直しし、松竹側も患者団体が書いた「御観覧の皆様へ」と題するパンフレットを封切館に置いて客に配ることで、いったん話合いがついたが、若い患者たちの一部が「全く問題が解決されていない」と抗議を続行。著者の「医学辞典に基づいて書いた」との説明から出版元があわてて辞典の書きかえを始めるなど、波紋は医学界にも及んだ。戦前の常識が存続し、誤解のまま社会的にも通用していた事実が浮彫りにされたことに患者たちは根の深さを感じている(毎日新聞 [1977])。

3月18日に映画『錆びた炎』の上映は終了し、3月20日付で医学的な誤りの訂正がされた『錆びた炎』第4版が発行される。偏見をなくす会は3月22日から24日にかけて東京で合宿を行い、今後の運動方針について議論した(木野内 [1977])。

## 5. 抗議運動の終結

ここでは、血友病患者とその家族の組織「全国ヘモフィリア友の会」(以下、全友)<sup>5</sup>や、血友病患者本人の組織「Young Hemophiliac Club」(以下、YHC)<sup>6</sup>などの動きに触れながら、抗議運動が終結する過程を述べる。

全友は「錆びた炎」問題に対して組織的な動きをしていない。会長の北村千之進は、小林と角川書店、松竹に全友会長としての要望(詳細は不明)を伝えたが、声明文など公の形は取っていない。小林が南山堂『医学大辞典』を参考にしたことを表明すると、北村は南山堂へ問い合わせた。南山堂は、辞典の内容は10年位前の血友病の状況であると説明し、これらの問題は南山堂の責任において処理すると答えた。北村は、帝京大学の医師である安部英に血友病についての原稿を書いてもらうよう、南山堂に要請した(北村 [1977])。南山堂の自主的な対応には、新聞記事に取り上げられたことが大きく影響していると思われる。

他方、YHCでは「錆びた炎」問題を、血友病患者の進学・就職・結婚に関わる問題として受け止め、抗議運動を継続して展開していくべきだとの主張が大勢であった。しかし、前述の東友会の抗議文、北村の南山堂への改訂の働きかけがあったので、「YHCとして活動すれば角が立つ」(YHC [1981 : 26]) という意見も出た。そこで、YHCの抗議続行派は東友会の木野内らと合流し、3月5日に偏見をなくす会を立ち上げた。

北村は「錆びた炎」問題を『医学大辞典』改訂という方法で收拾しようと考えた。しかし、関西の若手血友病患者(YHC会員も一部含む)は、「錆びた炎」問題に対する北村の個人的な対応を一定程度は評価しながらも、全友の組織としての取り組みが乏しいことに不満を覚えていた。例えば、西村聡文ら有志代表6名は、家族を含めた30名あ

まりの意見として、全友に以下のような要望を行った。

三版以前の『錆びた炎』および松竹映画の読者および観客に対してこれらの中で描かれた血友病というもの  
が誤りであるということを知らせる手段を講じて欲しいということなのです。すなわち四版が訂正された  
はいえ、三版以前の『錆びた炎』の読者、映画の観客には何の意味もありません。『錆びた炎』の中の血友病の  
記述が誤ったものであるということを徹底してこれらの読者・観客のという一般の人々に知られるのでなけ  
れば、訂正された四版が発行されても、また著者があとがきで詫言としてこの問題はなんら解決しないの  
です(西村 [1977])。

『錆びた炎』第4版改訂と南山堂『医学大辞典』改訂だけでは問題は解決していない、というのが、抗議続行を  
主張する血友病者の共通認識であった。さらに西村らは、7月31日に開催予定の全友理事会への参加も求めた。北  
村は、4月15日付の理事会開催通知に同封した書簡において、これまでの経緯を改めて説明するとともに、理事会  
で「錆びた炎」問題を議題として取り上げること、西村ら希望者が理事会に参加することを快諾した(北村 [1977])。  
理事会の中で「錆びた炎」問題について、どのような議論をされたのかは分からない。けれども、毎日新聞に記事  
が載って以降、主だった運動はなくなっている(木野内 [1978: 102 - 103])ことから、最終的に全友の組織的な運  
動は生まれなかった。

後にYHCは、1981年の機関誌『アレクセイの仲間たち』第13号で、抗議運動について「新聞記事にとりあげられ  
たりいたしました。力不足で結局うやむやになってしまいました」(YHC [1981: 26])と総括している。

ここで、偏見をなくす会やYHCなどの若手血友病患者と、全友の北村の「錆びた炎」問題への対応の異同を整理し  
よう。両者ともに、何らかの形で血友病の医学的記述の誤りやその認識を正そうと考えたことは同じである。しか  
し、その方法や考え方には相違があった。北村は『錆びた炎』の記述訂正や、小林が参考にしたという『医学大辞  
典』改訂をもって誤りを正そうとした。それに対して、偏見をなくす会などは記述の誤りを正すだけでは不充分で  
あると考えて、もっと多くの人々に「錆びた炎」問題を訴えようとした。それを通じて、血友病に対する「イメ  
ージを今のうちに正しいものへと変えていく必要がある」(西村 [1977])と考えたのである。偏見をなくす会などの  
若手血友病患者が抗議運動を広げる方向で考えたのは、第7節で述べるように、当時「今後この社会の中で活躍して  
いこうと」(西村 [1977])具体的に考え始めた若手血友病患者が一定数に達したためであろう。偏見をなくす会など  
の若手血友病患者と北村との間の「錆びた炎」問題に対する考え方の相違が、抗議運動のうやむやな終結を招いたの  
ではないだろうか。

## 6. 抗議運動の成果と限界

「錆びた炎」問題の抗議運動の具体的な成果は、第一に、新聞に何度も関連記事が取り上げられ、(どこまで浸透  
したかは別として)小林の記述が誤りであると公に知らしめたこと。第二に、松竹の映画館で「御観覧の皆様へ」  
と題するパンフレットを客に配らせたことが挙げられる。しかし、抗議運動そのものは前述のようにしぼんでいく。

ところが、思いがけないことに4年後の1981年に最も大きな成果が現れる。それは、YHCが映画『錆びた炎』の  
テレビ放映を未然に阻止したことである。1981年は、「錆びた炎」問題が再燃した年だった。まず、6月19日に『錆  
びた炎』が毎日ホール(大阪)で3回リバイバル上映されることが、新聞の映画広告欄から分かった。YHCでは緊  
急に理事会を開き、毎日ホールと松竹に別々に抗議することを決定した。毎日ホールには上映中止を求めたが、上  
映間近で急に差し替えができないため、アナウンスを上映開始前に流すことになった。その内容は次の通りである。

お客様にお断わり申し上げます。この映画の血友病に関しては、現在の医学の水準上ほとんど日常生活に支  
障がありません。非常に誤って伝わるところがありますので、予めご了承下さいませ(YHC [1981: 24])。

松竹に対しては、6月23日にYHCと松竹との話し合いの場を持った。そして、松竹関西支社の営業係から「もし、



他社から当フィルムの需要の要求があったときは、『このフィルムは、これこれしかじかの問題があって、やめられた方がいい』との助言をする」(YHC [1981: 25]) という回答を引き出した。しかし、他の地区やテレビについては関西支社の権限を超えるため、YHCは東京の松竹との交渉を検討し始めた。

その矢先、映画のリバイバル上映とは別個に、7月末に『錆びた炎』が8月9日の日本テレビで放映されると分かった。さっそくYHCは、日本テレビに抗議を行った。すると、翌日に日本テレビから、「調査した結果、たしかに事実と反するところがあるので中止する」(YHC [1981: 25]) との回答を得た。当時のYHC会長である西村の述懐によれば「当時のプロデューサーから放送法に触れる恐れがあるから中止したと聞いた」と言う。テレビ放映の問題が「わりとあっさり<sup>マ</sup>と解決し、私達は、ホットするやら、ひょうしぬけするやら」(YHC [1981: 25]) だったが、YHCの抗議がすんなりと通ったことは、これまでの抗議運動の最大の成果である。テレビが強い影響力を持つ現実を考え合わせると、映画『錆びた炎』のテレビ放映を未然に阻止した意味は大きい。

ここで、「錆びた炎」問題の抗議運動の到達点とその限界を確認しておこう。「錆びた炎」問題の抗議運動では、少数の血友病患者本人の有志たちが自ら積極的に動き、マスメディアに『錆びた炎』の持つ問題点を告発することに成功した。それは、1981年のテレビ放映阻止として大きな結実をみる。前述したように、抗議運動に主体的に関わった血友病患者たちは、抗議運動を広く継続して展開しようと考えていたが、抗議運動をそこまで展開できなかった。それがこの抗議運動の限界である。

## 7. 1970年代における超克

それでは、戦後日本の血友病患者の歴史にとって、「錆びた炎」問題の抗議運動はどのような歴史的意義があったのだろうか。

1970年代は、血友病患者にとって大きな転換期であった。1975年にYHCが結成されたことが象徴するように、血友病患者本人の社会参加が拡大していった時期である。しかし同時に、1971年の教育権の保障を問うた浦高事件<sup>7</sup>が起こったように「助からない病気」「恐ろしい病気」という血友病の表象<sup>8</sup>を未だに抱えたままだった。「錆びた炎」問題において、血友病患者本人たち自らが、古くから続く血友病の表象の問題に初めて挑んだのである。この抗議運動は、医療（特に血液製剤）を抛りどころとして、血友病患者本人の社会参加は可能だ、と主張した運動である。そして、血友病患者本人による抗議行動である点が、以前の浦高事件との決定的な相違であり、それこそが「錆びた炎」問題の抗議運動の歴史的意義である。

血友病治療にとって、止血効果の優れた血液製剤、クリオプレシピレート製剤の治験が1965年頃から始まったことは画期的であった。しかし、血液製剤は非常に高価であり、さらに当時は血液製剤の供給量も少なかった。そこで1967年3月、東京都千代田区の全国町村会館において、全国ヘモフィリア友の会が結成された。血友病患者が結集して全国団体を作ることで、血液製剤の需要があることを証明しようと考えたのである（静岡県ヘモフィリア友の会 [2001]）。翌1968年から医療費の公費負担が始まり、1973年には「小児慢性特定疾患治療事業」<sup>9</sup>として18歳（延長して20歳）という年齢制限付きながら、公費負担が受けられるようになった。

それと並行して1970年代から、自己注射が日常生活の必要性から非公認のまま、血友病患者の間に普及し始めた。「公費負担と自己注射のセット」が曲がりなりにも現実になったことで、血友病患者は就職や結婚を具体的に考えるようになった。自己注射による止血管理は、血友病患者の生活を病院から切り離れた。もちろん、医療から完全に離れることはできないけれども、血友病患者は自己注射によって、今までとは比較にならない広い行動範囲を手に入れたのである。積極的な社会参加を目指した1970年代当時の若い血友病患者には、血友病はたいしたことはない、と言いたい気分が強かった。そのような時期に「錆びた炎」問題が顕在化したために、「錆びた炎」問題を徹底的に追及して、血友病はたいしたことはない、と繰り返し言う必要があったのである。

「錆びた炎」問題の後も、1980年の「神聖な義務」<sup>10</sup>、1981年の「ブラックジャック」問題<sup>11</sup>と、血友病患者にとって不愉快な出来事は続く。また、1980年代から1990年代においては「薬害」<sup>12</sup>が起こった。問題が起こるたびに血友病患者たちは対応してきたが、振り返ってみれば、血友病患者本人による運動の原点は「錆びた炎」問題にある。

第1節で取り上げた『失脚』の書評の最後で、二日市は「薬害HIV訴訟における血友病患者たちの積極的な姿勢は、

四〇年を経た後の『失脚』の世界の超克である」(二日市 [2002: 205]) と述べているが、これは誤りである。少なくとも正確ではない。実際には、1970年代からゆっくりと、しかし確実に大きな変化が起こり始め、1977年の「錆びた炎」問題における抗議運動において、明らかに血友病者は『失脚』を超えた。「錆びた炎」問題の抗議運動こそが『失脚』の世界の超克である。

血友病者は長い間、昔からの「助からない病気」「恐ろしい病気」という血友病の表象と闘ってきたし、今もなお、血友病への適切な理解を希求し続けている。現在、多くの地域の患者会が「家族の会」から「本人の会」へ脱皮しようとしている。そのような現状を踏まえるとき、「錆びた炎」問題の抗議運動は、「血友病者本人の運動」の先駆として評価されるべき今日的意義を持っている。

本稿では、「錆びた炎」問題の論点全体はおおむね検討できたと思われるが、1970年代当時の血友病者が置かれていた社会的状況はそれほど明確に記述できなかった。今後は、1970年代の歴史的背景を含めた分析を行って詳細に描出したい。

## 注

- 1 血友病は先天性血液凝固障害の一部である。その他にも様々な先天性血液凝固障害がある。本稿では、先天性血液凝固第 因子障害 (血友病A) と先天性血液凝固第 因子障害 (血友病B) を総称して、血友病と呼ぶ。
- 2 本稿では、基本的に「血友病」「血友病者」と表記する。ただし、引用などについては、原文どおり「血友病患者」を用いる。
- 3 日本てんかん協会は、筒井康隆『無人警察』が角川書店の国語教科書に掲載されるにあたり、作品中に出てくる「比喩としてのてんかん者」の理解の仕方と、それらの教育現場での展開のされ方を問題にした(生瀬 [1994: 113])。
- 4 東友会は、「医療情報の交換、それに基づいての福祉制度への働きかけなど」(木野内 [1978: 118]) を活動の中心として、血友病者本人とその家族で組織された患者会。血友病者本人だけでなく、その家族も含めて「同病の人たちと話し合えば一人で悩むよりもよいといったような、同病相憐む」(木野内 [1978: 118]) という性格を持っていた。1978年時点で会員数約240名(木野内 [1978: 104])。地域の血友病患者会としてはかなり大きい。設立年などの詳細は、現在調査中である。
- 5 全友は、1967年に全国各地の血友病者本人とその家族が集まって結成された。1982年時点で会員数1867名、39都道府県にヘモフィリア友の会が結成されている(全友 [1982: 24-30])。東友会などの地域の患者会の「連合体」という性格を持つ。
- 6 YHCは、1974年夏、京都で行われた「青年の集い」をきっかけとして、翌1975年7月27日、近畿圏を中心とした血友病者本人の手によって結成され、運営された組織。YHC会員は近畿を中心として、東は名古屋、西は広島まで広がった。YHC機関誌『アレクセイの仲間たち』準備号には「最も悩み多き世代の青年層のヘモフィリア患者が、ヘモフィリアによる諸問題(教育・就職・結婚etc.)のために、一人で悶々とした日々をすごし、その問題を解消するすべを知らないままに放置されているのが現状ではないでしょうか」(YHC [1975]) とある。会員数は、1881年時点で約90名(西村 [1981])。組織の性格は東友会や全友と明らかに一線を画する。
- 7 浦高事件は、「大西赤人君浦高入学不当拒否事件」の略称。1971年3月、大西赤人は浦和高校入学を受験した。試験結果は合格圏内だったが、入学はならなかった。浦和高校の「赤人君の内申書の総合評点が低いために、不合格とせざるを得なかった」(大西赤人 [1973: 38]) という説明に対して、赤人と父・大西巨人は不合格の撤回を求めた。その抗議に賛同した人々が「大西問題を契機として障害者の教育権を実現する会」(後の「障害者の教育権を実現する会」) を結成した(傍点原文)。
- 8 大西赤人 [1973] や松嶋 [1974]、草伏 [1992]、増補1993] によって、「助からない病気」「恐ろしい病気」と言われていた時期の様子が多少分かる。
- 9 現在、20歳以上になると、「先天性血液凝固因子障害等治療研究事業」に切り替えることによって公費負担を受けることができる。
- 10 「神聖な義務」は、1980年秋に大西巨人と渡部昇一を中心に起こった事件である。渡部は、2人の血友病者の父親である大西を名指しで、長男が血友病と分かっている次男をもうけたことについて「現在では治癒不可能な悪性の遺伝病をもつ子どもを作るような試みは慎んだ方が人間の尊厳にふさわしい」(渡部 [1980: 135]) と述べた。それに対して、大西 [1980] が痛烈に批判した。朝日新聞 [1980] が大西の批判を大きく取り扱い、横田 [1981] を会長とする「青い芝の会」神奈川県連合会、高 [1980]、木田 [1980]、本多 [1980]、野坂 [1980] らが渡部を批判している。
- 11 「ブラックジャック」問題は、テレビ朝日系列で放映されたテレビドラマ『加山雄三のブラックジャック』第8話「血がとまらない」(1981年3月5日放送)において、医学的に誤った血友病者の描かれ方をされたこと。YHCはテレビ朝日に抗議をした。これについては、山本 [1981] など。
- 12 血友病者への非加熱血液製剤投与を原因とする感染はHIVのほか、HBV (B型肝炎) HCV (C型肝炎) もある。これら一連の出来事については、根本的なところからの再検討が必要のため、「薬害」とカギカッコをつけたままにしておく。

## 参考文献

- 有馬頼義 1958 『失脚』中央公論社
- 朝日新聞 1980 「大西巨人氏vs.渡部昇一氏」『朝日新聞』1980 - 10 - 15朝刊
- 浅野潜 1977 「自作を脚本、プロデュース 小林久三」『東京スポーツ』1977 - 02 - 27
- 二日市安 2002 「有馬頼義 『失脚』」花田春兆編 [2002 : 202 - 206 ]
- 権田萬治 1977 「現代推理小説の方向 現代推理小説と医学 小林久三 『錆びた炎』をめぐって」『幻影城』5月号pp130 - 141
- 女性セブン 1977 「対談 森村誠一VS小林久三 『推理小説の中の事件と現実の犯罪の差』」『女性セブン』3月17日号p182
- 木田盈四郎 1980 「遺伝病に正しい関心を」『朝日新聞』1980 - 11 - 18夕刊
- 木野内荘三 1977 「血友病にたいする偏見をなくす会合報告」血友病にたいする偏見をなくす会
- 木野内荘三 1978 「小説 『錆びた炎』問題始末 フィクションにあらわれた障害者差別」『障害者教育研究』第1号pp101 - 119 障害者の教育権を実現する会
- 北村健太郎 2003 「『神聖な義務』論争をめぐって」第76回日本社会学会報告原稿
- 北村千之進 1977 「昭和52年度第2回理事会開催通知および書簡」全国ヘモフィリア友の会 1977 - 04 - 15
- 小林久三 1977 『錆びた炎』角川書店
- 高史明 1980 「自助的精神の“使徒” 渡部昇一教授に与う」『毎日新聞』1980 - 11 - 07夕刊
- 神戸新聞 1977 「血友病正しく伝えて 誤解招く映画 『錆びた炎』」『神戸新聞』1977 - 02 - 28朝刊
- 厚生省五十年史編集委員会 1988 『厚生省五十年史（記述篇）』中央法規
- 厚生省五十年史編集委員会 1988 『厚生省五十年史（資料篇）』中央法規
- 草伏村生 1992 増補1993 『冬の銀河』不知火書房
- 花房秀次編 1998 『血友病の子どもたちを担当される先生方へ』バイエル薬品株式会社
- 花田春兆編 2002 『日本文学のなかの障害者像 近・現代篇』明石書店
- 本多勝一 1980 「不連続線 『痴的論証の方法』」『朝日新聞』1980 - 11 - 25夕刊
- 岩下治 1977 「偏見を助長する記述やめて」『毎日新聞』1977 - 03 - 02朝刊
- 毎日新聞 1977 「『血友病』織り込んだ推理小説 医学界に波紋」『毎日新聞』1977 - 03 - 13朝刊
- 松原洋子 2000 「日本 - 戦後の優生保護法という断種法」米本・松原・棚島・市野川 [2000 : 169 - 236 ]
- 松嶋磐根 1974 「暗き血の淵より」『主婦と生活』主婦と生活社
- 三間屋純一 1997 『患者さん指導のためのガイドブック 血友病』バイエル薬品株式会社
- 森村誠一 1977 「紙上犯罪遊戯のルール 著者から読者へのメッセージ」『森村誠一長編推理選集第9巻月報6』講談社
- 永峯博編 1983 『血友病児の教育』慶應通信
- 生瀬克己 1994 『障害者と差別表現』明石書店
- 西田恭治 1977 「血友病への偏見を促す小林久三（『錆びた炎』著者）に抗議する！」血友病にたいする偏見をなくす会
- 西村聡文 1977 「『錆びた炎』問題に関する全友への要望書」若手血友病者有志
- 西村聡文 1981 「『錆びた炎』テレビ放映中止に関する資料」Young Hemophiliac Club
- 野坂昭如 1980 「野坂昭如のオフサイド80 『渡部昇一の知性と想像力なき勇氣』」『週刊朝日』11月7日号pp140 - 141
- 大西赤人 1973 「僕の『闘病記』」大西赤人・大西巨人 [1973 : 24 - 39 ]
- 大西赤人・大西巨人 1973 『時と無限』創樹社
- 大西巨人 1958 「理念回復への志向 有馬頼義と長谷川四郎」『図書新聞』1958 - 06 - 14
- 大西巨人 1980 「井蛙雑筆 十七 破廉恥漢渡部昇一の面皮をはぐ」『社会評論』第29号pp110 - 128 活動家集団思想運動
- 静岡県ヘモフィリア友の会 2001 <http://www.e-switch.jp/seiyukai/> 2005 - 01 - 17
- 杉本章 2001 『障害者はどう生きてきたか』ノーマライゼーションプランニング
- 障害者の教育権を実現する会 1998 <http://www.os.rim.or.jp/~cerp/> 2005 - 01 - 17
- 週刊新潮 1980 「大西巨人家の『神聖な義務』」『週刊新潮』9月18日号 新潮社
- 渡部昇一 1980 「古語俗解 『神聖な義務』」『週刊文春』10月2日号pp134 - 135 文藝春秋
- 山本健二 1981 「天才外科医ブラック・ジャック その無知は、何をもたらすか」『人権と教育』95号p15 障害者の教育権を実現する会
- 安間隆次 1977 「清張と正史の間 最近の推理小説をめぐって」『朝日新聞』1977 - 02 - 07朝刊
- 横田弘 1981 「渡部昇一氏の『神聖な義務』との闘い」『福祉労働』第10号pp126 - 140 現代書館
- 米本昌平・松原洋子・棚島次郎・市野川容孝 2000 『優生学と人間社会』講談社現代新書
- 吉田邦男・福武勝博・安部英・神前五郎監修 1981 『血友病』全国ヘモフィリア友の会

Core Ethics Vol. 1 (2005)

- Young Hemophiliac Club 1975 『アレクセイの仲間たち』準備号 YHC編集部  
Young Hemophiliac Club 1977 「小説『錆びた炎』における問題点」YHC内部資料  
Young Hemophiliac Club 1981 『アレクセイの仲間たち』第13号 YHC編集部  
財団法人エイズ予防財団 2004 『血液凝固因子異常症全国調査 平成15年度報告書』財団法人エイズ予防財団  
全国ヘモフィリア友の会 1982 『全友』第18号 全国ヘモフィリア友の会

## The *Sabita Honoo* problem and its contemporary significance

KITAMURA Kentaro

Abstract:

A mystery novel dealing with hemophilia, *Sabita Honoo* (*Rusty Flame*) aroused a strong protest movement in 1977. The purposes of this article are firstly to examine the main points in the *Sabita Honoo* debate, secondly to describe the social situation of hemophiliacs in 1970's Japan, and finally to discuss how historically significant the protest movement by hemophiliacs was.

The protest informed the mass medias that the novel had medically misdescribed hemophilia. Its biggest achievement was to obstruct the movie's telecast in 1981. But, the protest did not develop widely or continuously beyond the hemophiliacs' proposal.

It is of historical significance that the protest movement was generated by hemophiliacs. Public health coverage of medical treatment and home infusion was achieved in 1970's. Young hemophiliacs aimed at the time to achieve affirmative social participation; therefore, it was necessary to make it clear that hemophilia was not a fearful disease. The contemporary significance of this protest movement is that it was a pioneering exercise by hemophiliacs themselves.

Key words : Hemophilia, Protest movement, 1970's, Mass media